



Data 2022-147

監督: 山崎樹一郎

出演: カン・ユンス/袴キララ/川瀬陽太/和田光沙/三浦誠己/青木崇高/桜まゆみ/松浦祐也/黒住尚生

👁️👁️ みどころ

農業をしながら真庭市で独自の映画製作に励む山崎樹一郎監督の第3作目のテーマは、日陰に咲く“やまぶき”。その主張は、「資本主義と家父長制社会に潜む悲劇と、その果てにある希望を描き出した群像劇」とクソ難しいが、16ミリでの陰影に富んだ撮影はその一助に！

3人の日陰モノ(?)の主人公に光を当てた(?)本作の核は、ある窃盗事件の勃発！しかし、窃盗？それとも遺失物損壊？をめぐるリーガルチェックには、大いに疑問あり！

邦画界ではこの手の映画の人气が高く、新聞紙評でも概ね好評・高評価だが、残念ながら私にはイマイチ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■やまぶきとは？山崎樹一郎監督はなぜそれをタイトルに■□■

日本で最も有名かつすべての国民から最も愛されている花は、桜。その美しさとはかなさは、日本人の心情にピッタリだ。それに対して、マルチェロ・マストロヤニとソフィア・ローレンが共演した映画『ひまわり』(70年)が、2022年2月24日に突然起きたロシアによるウクライナ侵攻によって見直され、再上映されたのは、同作で見た、スクリーンいっぱいに広がる美しいひまわり畑の風景のためだ。

私が弁護士登録をした1974年にヒットしたTV番組が『帽子とひまわり』。そのタイトルとされた帽子は、屋外の仕事が多い調査員のアイテムであるのに対し、ひまわりは弁護士バッジのデザインだ。また、松嶋菜々子が弁護士を目指して司法試験を突破し、司法修習で厳しい現実と向き合いながら、一人前の弁護士になるまでを描いた、1996年のNHK連続テレビ小説のタイトルも『ひまわり』だった。なぜ弁護士バッジにひまわりが描かれているのかは、各自しっかり調べてもらいたい。

そんなひまわりと対照的な花が「山吹」。黄色い可憐な花を咲かせる山吹は、太陽に向かって咲くひまわりとは逆に、日の当たりづらい場所でしか咲かない野生の花らしい。また、黄色い花を咲かせる山吹は、金色に輝く大判小判を連想させ、日本の TV 時代劇によく登場する、悪徳代官が悪徳商人に要求する“賄賂”をイメージさせるため、その“隠語”としてもよく使われている。

岡山県真庭市で農業を営みながら独自の映画製作を続けている山崎樹一郎監督はそんな山吹にずっと注目していたそうだが、それは一体なぜ？

■□■山崎監督は第3作をなぜ16ミリで？そのテーマは？■□■

本作は山崎樹一郎監督の長編第3作。私は第1作『ひかりのおと』（11年）は観ていないが、時代劇だった2作目の『新しき民』（14年）（『シネマ35』278頁）はなかなかのものだった。そんな彼の長編第3作となる本作は、はじめて16ミリフィルムで撮影したが、それは一体なぜ？

本作の舞台ももちろん、山崎監督がトコトンこだわっている移住先の真庭市。“やまぶき”をモチーフとして描き出す本作のテーマは、チラシによると、「資本主義と家父長制社会に潜む悲劇と、その果てにある希望 地方に生きる人々の慎ましい抵抗を国際的な視座で描く」というクソ難しいものらしい。それを後述する3人の主人公を中心とする群像劇の中で、そして、ざらついた16ミリフィルムによって、混濁を深めながら描くそうだが、さてその成否は？

それは、本作がカンヌ国際映画祭 ACID 部門やロッテルダム国際映画祭で絶賛され、各地でロング公開が続いていることから明らかだが、残念ながら私にはピッタリこなかった。それは一体、なぜ？

■□■3人の主人公のキャラに注目（1）－2人の男たちは？■□■

本作には3人の主人公が登場するので、まずはそのキャラに注目。第1の主人公は、かつては韓国の乗馬界のホープだったが、父親の会社の倒産で多額の負債を背負って真庭市に流れつき、今はベトナム人労働者たちとともに採石場で働いている男、チャンス（カン・ユンス）。真庭市にこんな大規模な採石場があることにびっくりだが、現場で働いている多くの人がベトナム人やチャンスのような韓国人ばかりなのは一体なぜ？それは考えればすぐにわかることで、今ドキの日本の若者にはこんな過酷な環境下で働く者などいないということだ。しかし、ベトナム人もチャンスもここで一生懸命働き、自国に送金をしているらしい。もっとも、そんな現場、そんなまちには怪しげなギャングまがいの男もいるそうだから、用心も必要！

チャンスは子連れの子、美南（和田光沙）と一緒に住んでいるが、2人は正式の夫婦ではなさそう。本作後半には、美南の夫も登場してくるので、それにも注目！それはともかく、ある日、会社に呼び出されたチャンスは、採石現場での真面目な働きぶりが認められ、正規社員にしてやると言われたから大喜び。美南も大喜びだが・・・。

第2の主人公は、女子高生の娘、早川山吹（袴キララ）と二人暮らしをしている刑事の父親（川瀬陽太）だ。妻は戦場ジャーナリストとして働く中で死亡したそうだが、彼はなぜそんな女性と結婚したの？それはともかく、彼は若手刑事とともに殺人事件の捜査にあたっているようだが、週末ごとに山歩きに出かけている上、スクリーン上にはラブホテルで韓国人の若い女性と情事を交わす彼の姿が登場するので、アレレ・・・？現職の警官のくせに、そんなことをしていいの？しかも、来週の山歩きにはこの韓国人女性も連れていくと約束しているから、さらにアレレ・・・？

■□■3人の主人公のキャラに注目（2）—女子高生の娘は？■□■

第3の主人公は山吹という奇妙な名前をつけられた刑事の娘だ。『男はつらいよ』シリーズの主人公であるフーテンの寅さんの妹は“さくら”だったから、すべての日本国民に愛されたが、もし彼女が“山吹”だったら、さて・・・？母親と死別した後、父親との二人暮らしの中で彼女がどんな娘に育ったのかは知らないが、本作では、なぜか交差点で1人、サイレントスタンディングを始める彼女の姿が描かれるので、それに注目！

2022年2月24日にロシアによるウクライナ進攻が始まった今、今さら「平和憲法を守れ！」だけでは平和は守れないことは明白！私はそう考えているが、この手の「平和勢力」が日本にずっと存在することは周知の事実だ。しかし、なぜ山吹は1人でサイレントスタンディングに参加したの？

本作の主人公は以上の3人だが、この3人が3人とも“さくら”的でも“ひまわり”的でもなく、“山吹”的なのが本作最大の特徴だ。あえて言えば、戦場ジャーナリストとして死亡したという刑事の妻＝山吹の母親だけは、“さくら”的、“ひまわり”的だったようだが、なぜ山崎監督はそんな“さくら”的、“ひまわり”的なのに注目せず、“山吹”的な3人の主人公に注目したの？本作ではそれをしっかり考えたい。

■□■静かな田舎町にも、こんな事件あんな事件が■□■

東京の新宿や池袋は中国人マフィア(?)をはじめとする異様な雰囲気があるようだが、風光明媚で静かな田舎町たる真庭市は、そんないざこざとは無縁。そう思っていたが、山吹の父親は殺人事件の捜査にあたっているようだし、ベトナム人や韓国人を働かせている採石場の近くにある夜の飲み屋に出入りしている男たちの姿を見ると一波乱ありそうだ。さらに、なぜかはわからないが、その中の1人は拳銃まで持っているし、横領絡み、賄賂絡みで数千万円は入っていると思われるボストンバッグをめぐる持ち逃げ事件まで発生するので、それに注目！

他方、山吹の父親が週末を利用して山歩きをするのは自由だが、日陰に咲く山吹にこだわる彼が斜面に咲くそれを韓国人の恋人(?)にプレゼントしようとして土を掘りかけると、小さいながら一種の土砂崩れが発生し、下の方で大きな音がしたからアレレ・・・？こりゃ、何かヤバいことが起きたのでは？そう思っていると、正社員になることに胸を膨らませながら運転していたチャンスの車が、上から落ちてきた石の下敷きとなり、動けな

なくなったチャンスがスクリーンいっぱいに登場するから、さあ大変！誰の助けもなく、このままチャンスは死んでしまうの？一瞬、そんな心配もしたが、その後、足を骨折したチャンスが病院のベッドの上で寝ている姿を見せてくれるので一安心。しかし、日本の企業は冷酷だから、チャンスがもはや採石現場でクレーン車を操作することができないと判断した経営者は、「正社員への道はなくなった。事務仕事なら何とか・・・」と、事実上のクビ宣言。「保険金は出るのだろう」との要らざる発言には余計腹が立つが、さあ、チャンスはどうするの？

かつて乗馬界のホープだったチャンスが、美南や子供を連れて乗馬場に行った時は本当に楽しそうだったが、今のチャンスは最悪。「俺はまだ現場で働けるぞ」とばかりに、松葉杖で現場に戻り、クレーン車を操作しようと頑張ったが、所詮無理。これでは、まさに絶望！そう思ったチャンス目の前に、空中を舞うボストンバッグの姿が！あれは一体ナニ？ひょっとして、あの中にはいいものが？そう考え、落下点まで駆けつけたチャンスが、ボストンバッグを開けてみると・・・。

■□■遺失物横領？それとも窃盗？リーガルチェックは？■□■

司法試験に向けて刑法各論の財産犯の勉強をしていた時、窃盗罪、横領罪、背任罪の相違点の理解は難しかった。それに比べれば、窃盗と遺失物横領との違いは理解しやすかった。しかし、採石現場で発見したボストンバッグの中から、約半分の現金だけを服の中に隠して逃走したチャンスは犯罪は何か・・・？これは遺失物横領罪？それとも窃盗罪？

それは司法試験の受験生には面白い問題だが、映画としてはイマイチ。なぜチャンスはボストンバッグをそのまま持ち帰らず、現金だけを、しかも、その約半分だけを抜き取り、それを服に隠して自宅に戻ったの？また、ビニール袋に詰め、土を掘った庭の中に埋めているチャンスを見ると「哀れ」を誘うが、一体チャンスはこの現金をどうするつもりなの？そう思っていると、ある日、チャンスは子供のためにデパートで8万円もする高価なプレゼントを現金で買ったからアレレ。そんなことをすれば、すぐにバレしてしまうのでは？案の定、そんな想定通り、チャンスは山吹の父たちによって逮捕され、新聞にも載ることになったが、チャンスは国選弁護人は一体どんな弁護をするの？それはさておき、チャンスは取り調べの刑事に対して、素人ながら「僕の罪は遺失物横領罪ですか？」と質問。そして、それに対する刑事の回答は「使っていれば窃盗だ」とのこと。すると、8万円をデパートで使ってしまったチャンスは犯罪は窃盗罪？起訴されれば、その罪は大体どれくらい？

他方、チャンスを取り調べに当たった山吹の父は、チャンスが松葉杖をついていたのは、あの日、自分が山吹を取る時に、斜面から石が落下したためと認識していたから、罪の意識でいっぱい。思わず、そんな告白をしかけたのを、相棒の若手刑事から止められたほどだった。ところが、心配して警察に駆けつけてきた美南の前にチャンスが登場し、「刑事さんが釈放してくれた。落とし物を届けてくれたただけだって」とのストーリーが展開してい

くから、アレレ？そんな馬鹿な！これは一体ナニ。山崎監督は日本の警察制度、司法制度をどう理解しているの？そして本作のリーガルチェックは一体どうなっているの？こりゃダメだ！そんな感を強くしていくことに・・・。

■□■主人公たちの結末は？本作の評価は？■□■

私は、山吹のようなサイレントスタンディングを否定するものではないが、高くも評価していない。なぜなら、自分が何かを主張したいのなら、もっと正確に言えば、主張したい何かを持っているのなら、さらにそれが「銃口に花束を！」の言葉に集約されるような政治的な主張であるのなら、それをサイレントスタンディングで示すよりも、多くの人々との対話や議論を求める方がより効率的だし、自分自身の勉強や進歩にもなると考えているからだ。学生時代にカンパ活動のため何度も街頭に立った経験を有する私にとって、そこでいろいろと質問され、議論をしたことが大きな財産になったという自負心もある。

本作では、山吹の魅力に惹かれ、山吹との交際を願う同級生(?)が“自分の主張のため”というよりも、“山吹と一緒にいたいため”に、あえてサイレントスタンディングをする姿が描かれる。しかし、これは、滑稽以上にナンセンス極まりないものだ。山吹も「山吹」という名前のおり、引込み事案のようだから、積極的に自分が主張したいテーマのためにクラス討論を呼び掛けたりすることはできないようだ。もし私が「銃口に花束を！」のような主張を持っているのなら、きっとそうするだろう。

他方、山吹の父親は、結局自分の過失をチャンスに告げないままチャンスを釈放してしまったようだが、その後の刑事の立場はどうなるの？それは本作では全く描かれないから、アレレ・・・？そして、もう一人の主人公チャンスについては、本当の奥さんと同じように一緒に暮らしていた美南が、長年別れていた夫と再会した後、どうなったかを含めて、釈放されて家に戻ってきた後の新たな生活に注目したい。

本作についての新聞紙評は概ね好意的で、①日陰に咲く「ヤマブキ」モチーフ、②悲劇・希望 運命の交錯描く、③怒りと沈黙の先 一筋の光、④地方から見える日本の問題、等の見出しで、「資本主義と家父長制社会に潜む悲劇と、その果てにある希望を描き出した群像劇である」という、本作のテーマに沿った褒め言葉を並べている。しかし、私には、ハッキリ言ってこの手の映画はイマイチ・・・。

2023 (令和5) 年1月13日記